

厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）

総括研究報告書

アルコール依存症の医療研修プログラムをモデルとした、オンライン研修に対応できる実践的な医療研修プログラムの標準化等を推進するための研究

研究代表者 大槻 眞嗣

**研究要旨** 本研究班ではアルコール依存症の完全オンラインでの医療研修プログラムを構築し、プログラムの評価と改善を行う。研修の効果・効率・魅力を高めるインタラクショナルデザインの手法を用いる。当事者、家族、診療に従事している多職種の医療従事者から意見を聞き、依存症医療の豊富な経験を有する研究協力者と共に、より実践的な医療研修プログラムの作成を試みる。また、多職種連携の視点を活かしたプログラムを構築する。更に、研修におけるファシリテーター養成を行って、持続可能な研修システムの構築を目指す。

**研究分担者氏名・所属研究機関名及び所属研究機関における職名**

佐久間 寛之  
(さいがた医療センター 院長)  
齋藤 利和  
(平岸病院 副理事長)  
杉浦 真由美  
(北海道大学 准教授)  
堀場 文彰  
(藤田医科大学 講師)  
稲熊 容子  
(藤田医科大学 准教授)

テム (Learning Management System) が普及して、紙媒体での資料や提出物が減少する傾向にある。コロナ禍となり、オンライン会議も急速に普及して Web 会議システムが利用し易くなったが、研修を完全にオンラインで行い、効果の効果を示した報告は殆どない。

アルコール依存症は有病率が高い割に、取り組む人材が不足しており、本症への対応力、実践力を持った人材を育成することが急務となっている。また、社会構造の変化に伴い、保健医療福祉の現場における多職種連携が必要不可欠な時代を迎えている。

本研究の目的は、アルコール依存症の医療研修プログラムをモデルとした、オンライン研修に対応できる実践的な医療研修プ

**A. 研究目的**

近年、学校の授業において学修管理シス

プログラムの標準化等を推進することである。

## B. 研究方法

プログラムは、研修の効果・効率・魅力を高める手法であるインストラクショナルデザインの方法論の一つである ADDIE モデルに基づき構築する。構成要素は、Analysis (分析)、Design (設計)、Development (開発)、Implementation (実施)、Evaluation (評価) であり、現場のニーズを明らかにした上で、目標と評価を設定したプログラムの開発を目指した。カークパトリックの4段階評価を用いて、受講者、及びプログラムの効果測定を行うこと、当事者・家族と外部の有識者として教育の専門家、アルコール依存症の専門家等を含むプログラム評価委員会を設置し、研修プログラムを評価することを計画した。

### (倫理面への配慮)

本研究は佐久間寛之分担研究者の所属するさいがた医療センター倫理委員会にて承認を得た。また、藤田医科大学の倫理委員会での審議を予定している。

## C. 研究結果

教育研修プログラムの開発において、「どのような人材を育成する必要があるか」についてのニーズを把握する必要がある。そこで、「アルコール依存症にかかわる医療者に必要な資質」に関する調査を実施した。その結果、知識に加えて、柔軟かつ多職種で連携しながら対応できる人材が求められた。また、研修の設計において参加者が学んだ知識を実際の現場で活用できるプログラムの必要性が示唆された。ニーズ調査の詳細は齋藤利和分担研究者、杉浦真由美分担研

究者の研究報告書において報告する。

プログラム内容を計画する上で、班員と研究協力者が密に意思疎通をはかることに留意した。2023年1月7日のワークショップ(1回目)において、「アルコール依存症の医療・福祉における支援に必要な資質・能力」について検討し、同年2月12日のワークショップ(2回目)において、「インストラクショナルデザインに基づいた学習コンテンツ作成方法と多職種連携に必要な能力」について学んだ。

その後、研修受講者の到達目標を設定した上でコンテンツの作成に着手した。以後、5チームに分かれて、リーダーがチームメンバーと連絡を取り合って、コンテンツを作成し、毎週、リーダー会議と班会議を続けて進捗状況を確認した。

基盤システムの開発として、研修を支える学修管理システム(Learning Management System)の構築を行った。詳細は堀場文彰研究分担者の研究報告書において報告する。

オンライン研修プログラムの枠組みを計画した。オンデマンド講義(合計10時間)とWeb会議方式の演習(合計6時間)の合計16時間とした。プログラムの参加者は、オンデマンド講義にて基本的な能力(知識など)を習得した上で、多職種参加型の演習に参加して、応用課題(技能、態度含む)に取り組む。オンデマンド講義では臨床現場での有用性の高い項目を優先し、体験談を含めた回復視点を重視した。また、演習では、臨床現場で遭遇しうる状況を想定し、問題解決する考え方を身につけることに留意した。また、研修受講者に、研修を受けた後に「価値ある変化」がみられることが、教育効果である。それ故、研修を受けた後の状態

と研修を受ける前の状態における到達度を各々測定して、両者のギャップを調査する計画を立てた。

2023年6月までに小規模トライアルを試行し、プログラム内容と評価方法を検証し、9月下旬にさいがた医療センターを基地局として、研修を実施する計画を立てた。また、研修を受講する「介入群」と研修を受講しない「対照群」（厳密に言えば、一定期間後に研修を受講する）を設けて、両群20名以上（5職種）の参加者を割り付けたRCTを行うことも計画した。更に、研修を行う前に、研修における指導者を養成するためのFD（合宿研修）を8月に齋藤利和分担研究者の施設で開催することを予定した。

#### D. 考察

オンライン研修に対応可能かつ臨床現場で即戦力となり得る医療従事者を養成できる実践的な医療研修として、アルコール依存症の新しい医療研修の構築に着目した。当事者、家族、そしてエキスパートに意見を求め、そこを起点として研修プログラムを作成することは新奇性が高く、有意義であると考えたからである。

本研究が令和4年度厚生労働省科学研究として採択されたのは2022年11月2日であり、2022年度の計画を遂行するのに時間的な制約が大きい状況にあった。そこで、班員は毎週1回、オンライン（Zoom）での定例会議を開催して、班員6名の殆どが参加して、①ニーズ調査、②基盤システムの開発、③研修プログラム内容の計画、④フォローアップ研修と指導者養成計画立案について取り組むことが出来た。

研究協力者はアルコール依存症について

の実務経験の豊富な多職種の医療従事者より構成した。当事者の意見をプログラム作成の初期から取り入れるため、当事者にも研究協力者に加わって頂いた。また、既存のアルコール依存症の医療従事者に対する研修を実施している久里浜医療センターの医療従事者も研修協力者に加わって頂くことも出来た。

ニーズ調査の結果、「アルコール依存症にかかわる医療者に必要な資質」が具体的に浮かび上がり、研修の到達目標を設定する際のヒントとなった。

研修参加者が個人で参加するオンデマンド研修において研修の到達目標に即した設問を設けること、多職種参加型の演習においてアクティブラーニングと多職種連携の視点を取り入れることも可能となった。

参加者が使い易いリモート会議システムと学修管理システムを当研修用にカスタマイズした基盤システムの開発に着手することも出来た。

以上のように、短い研究期間であったが、概ね、当初の計画通りに研究を進める事が出来た。

#### E. 結論

医学教育、多職種連携教育の専門家とアルコール依存症のエキスパートが研究班を結成して、オンライン研修に対応可能かつ臨床現場で即戦力となり得るアルコール依存症の医療従事者を養成するプログラムの全体構成を検討した。

2023年度は研修プログラムを整備した上で、研修を試行し、プログラムの評価と改善を行う。また、持続可能な研修システムを構築するために、指導者養成も行う。本研究の

成果として、真にアルコール依存症の知識と診療・支援スキルを身につけ実践することができる研修を開発することが期待される。

#### **F. 健康危険情報**

なし。

#### **G. 研究発表**

##### **1. 論文発表**

なし。

##### **2. 学会発表**

佐久間寛之、斎藤利和、大槻眞嗣、杉浦真由美、堀場文彰、稲熊容子、太田充彦、村山裕子、阿部かおり、大越拓郎  
「アルコール依存症研修に対するニーズおよび依存症医療者に必要な資質に関するエキスパート調査」第34回九州アルコール関連問題学会 2023.3.24（福岡）

#### **H. 知的財産権の出願・登録状況**

（予定を含む。）

##### **1. 特許取得**

なし。

##### **2. 実用新案登録**

なし。

##### **3. その他**

なし。